



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	源氏物語続編の研究 : 薫像の定立をめぐって
Author(s)	大朝, 雄二
Citation	北海道大学人文科学論集, 18, 33-49
Issue Date	1981-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34359
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_PR33-49.pdf



源氏物語統篇の研究

— 薫像の定立をめぐって —

はじめに

源氏物語統篇を論ずることのむずかしさは、始めも終りも定かないことにかかっている。たとえば、夢浮橋巻が完結なのか、それとも中絶なのかは、現在でもなお議論の分かれるところである。浮舟を中心とする主題に限定すれば、夢浮橋巻が完結であることを論ずるのは、さほど困難ではない。だが、幻巻を書き了えた後で、さらに統篇の物語を書きついでいった作者であることを考えるとき、浮舟をめぐる主題の完結が、ただちに作者の抱懐していた全主題の完結であるという切れるかどうかに不安が残る。もし紫式部に十分な体力と気力があつたならば、夢浮橋巻のあとに全く新しい展開を果したかもしれないのである。そして統篇研究で最初に逢着する難問は、その始まりがはっきりしない点である。統篇の本体がいわゆ

る宇治十帖であるのは動かないとして、それに先行する匂宮三帖をどう扱うべきか、あるいは匂宮三帖と宇治十帖の関係をどう把握して統篇論が行われるべきか、その辺りが極めて不分明である。

その点をもう少し細かにいえば、匂宮巻が「光かくれ給ひにし後……」と、光源氏没後の世界を語るところから書き起されていて、これが統篇の始発宣言であることは疑う余地がない。しかし、匂宮巻の巻末は中途半端な終り方をしていて、後統のどの巻にも繋がらない。しかも次巻の紅梅巻も又、匂宮巻同様に話題の突然の中断で巻を閉じているのであり、統篇始発部分の形態上の特徴は、匂宮巻から橋姫巻までの四帖が、それぞれ新しい書き出しでもって新しい人間関係を提示している点に求められる。新しい書き出しとは、前帖が中絶同様の終り方をしている事実の反面に外ならないのであって、なぜ始発部分がそのような複雑な形態になっているのかは、統篇論として避けて通ることは許されまい。^{注1}

大朝 雄二

その場合、匂宮巻の発端が光源氏に比肩できる人物など所詮は存在するはずがないことを確認した上で、当代を代表する貴公子として、今上の三の宮と宮の若君の二人を挙げ、続篇がこの二人を軸に展開するらしい予告となっている点に注意する必要がある。匂宮と薫とが対等の比重でわたり合う事件展開は、この予告にもかかわらず、浮舟巻まで待たなければならぬのも、続篇論の難問の一つである。いまその問題はさておくとして、光源氏にくらべたとき、匂宮も薫も共に一歩及ばないという根源的な評価が匂宮巻の冒頭に置かれていることの意味は、この上なく重いものがある。薫が生れながらに体から芳香を発する非凡人であるという描かれ方で、光源氏と一対の理想人物であるかに見えながら、薫と匂宮とは甲乙つけがたい人物であり、共に決して光源氏に匹敵するものではないことを、作者が続篇の始発宣言の中で明言しているのは見逃せない。

匂宮三帖から宇治十帖へという問題は、見方を変えていえば、薫という特殊な人物がどのようにして物語上に定立していくのか、ということにもなるかと思う。薫が物語史上空前の人物像であることについては、すでに清水好子氏の卓論があり、薫の「道心」と「俗物性」の共存ないしは相剋についても、すでに先覚諸家の論じられるところである。それら先覚に導かれながら、薫像定立の実体を探りたいというのが本稿の意図である。

一

匂宮巻に語られている薫の生い立ちを紹介する叙述は、あまりにも有名なのだが、あえて全文を引用する。

幼心地にはの聞き給ひし事の、折々いぶかしう、おぼつかなく思ひ渡れど、問ふべき人もなし。宮には、ことの気色にても、知りけり、とおぼされむ、かたはらいたき筋なれば、世ととも心に掛けて、「いかなりける事にかは。何の契にて、かう安からぬ思ひ添ひたる身にしもなり出でけむ。善巧太子のわが身に問ひけむ悟をも得てしがな」とぞ、ひとりごたれ給ひける。

おぼつかない誰に問はまじいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ

答ふべき人もなし。事に触れて、わが身につつがある心地するも、ただならずものなげかしくのみ、思ひめぐらしつつ、宮もかく盛の御容貌をやつし給ひて、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむき給ひけむ、かく思はずなりける事のみだれに、必ず憂しとおぼしなる節ありけむ、人もまさに漏り出で知らじやは、なほつつむべき事のきこえにより、われには気色を知らする人のなきなめり、と思ふ。明暮勤め給ふやうなめれど、はかもなくおほどき給へる女の御さとの程に、蓮の露も明かに、玉と磨き給はむ事も難し、五つのなにがしも、なほうしろめたきを、われ、この御みちをたすけて、同じうは後の世をだに、

と思ふ。かの過ぎ給ひにけむも、安からぬ思に結ばはれてや、などおしはかるに、世をかへても対面せまほしき心つきて、元服はもの憂がり給ひけれど、すまひはせず、おのづから世の中にもてなされて、まばゆきまではなやかなる御身の飾も、心につかずのみ、思ひしづまり給へり。朝日新聞社、日本古典全書「源氏物語」五、(二三九ページ—一四〇ページ)

薫の置かれた立場や心情など、極めて詳細に叙せられていることからも、これが統篇の執筆当初に作者の思い描いていた薫像の根本設定であるとして差し支えあるまい。

右に語られるもので第一に注目しなければならないのは、薫が元服以前の時点で、すでに実の父親が誰であるかまで含めて、己れの出生にかかわる秘密の全容をほぼ察知している点についてである。

それも誰か特定の人物から知らされたというのではなく、幼少の時に小耳に挟んだ断片的な話や、身辺の様子などから自分で推理して、独自に事の真相を知ったところに最大の特徴がある。すなわち、薫は今なお若々しく無邪気な母宮の尼姿に不審を感じ、出家するには何か重大な理由があったに違いないと考え、侍女たちだって当然事情を知っている者もいるはずなのに、誰も自分に語り聞かせてくれないのは、それがよほど深刻な秘密だからなのだ、と推理をめぐらせていく薫の思考は、ほとんど間然するところがない。少年の思考としては、このようにすべてを悪い方ばかり解釈していく少年の心理は、ひねくれた子供のひがみというべきであろう。たとえば「人

もまさに漏り出で知らじやは。なほつつむべき事のきこえにより、われに気色を知らする人のなきなめり」と推理している部分などは、普通にいえば被害妄想に近い。語るべき事実が存在しなかったから誰も喋らないのかもしれないというように考えようとはしない所に、この場面の薫の思考の特徴がある。だが、正篇を読み進めてきた読者にとっては、薫出生の事件は既知の事実なのであって、右のような薫の推理はそれを正確になぞるものである以上、納得せざるをえないものになっている。とても少年とは思われない聡明さを発揮して空怖ろしい秘密を知ってしまう薫、という人物設定が右の場面の最大の眼目になっている。読者は光源氏晩年の暗い運命の申し子として生をうけた薫の、いわば宿命的に内向し屈折する心理として納得するのである。

いま私は「宿命的」といったが、右の薫像がいわゆる「宿世論」と異なる次元で発想されていることに注意したいと思う。「宿世」なるものは、人の「知りがたきわざ」であり、「目に見えぬわざ」として、常に結果論に機能する性質のものであるが、薫は自分の前世の宿縁で現在が規制されているのではない。平俗にいってしまえば、まさに「親の因果が子に報い」たものであり、父母の犯した現世での過失が、いま薫を縛ってはなさないものである。薫自身が前世で犯した罪の報いを受けるのであれば、諦めもつこう。又、何よりもまず、宿世ならば薫にも世間の誰にも見えないものではないのに対して、薫出生にまつわる事件は、近い過去に現実存在した事実そのものである。

宇治十帖の物語が心理主義小説に近い実質を保有している、というような理解が、現代の読者の暗黙の了解になっているものの如くであるのだが、そのような読み方を可能にする根拠は、一にかかつて薫が出生の秘密に縛られている設定に由来しよう。母女三宮が世間にかくさなければならぬ秘密、そしてその秘密を知ってしまった薫という状況の下で、薫は前世の宿縁によって特別な人間なのではなく、「世間」の目をはばかって、そこから自由ではない人間、現実を超えて飛翔することが最初から許されていない人間、という明瞭に限定されていることで特殊な人物になっているのである。それはまさしく物語史上空前の人物設定といわなければならない。

その際に、薫出生の事件が単に女三宮の密通という個人レベルの問題ではなく、光源氏の人生史の中にあつて、はるか昔に遡って、藤壺事件との照応として意味を完結させるものであつたことに注意したい。女三宮・柏木の密通を可能にした直接の引き金が、六条御息所の死霊に導かれた紫上の病であつたことにより、薫に托された意味は明らかかなものがある。すなわち、薫の生れることになった密通事件は、形の上では柏木の盲目的な情熱と女三宮の幼なさの結果でありながら、大きな物語必然としては光源氏に働きかけた運命の象徴に外ならないのだ。光り輝く理想人物光源氏においてさえ、というよりも光源氏だったからこそ、避けることが叶わなかった晩年の宿命の象徴として生れた薫なのであつて、薫が光源氏と同じ意味同じ機能で主人公を演じうるべくもないのは、あまりにも当然であつた。光源氏のマイナスの宿命を背負つて生をうけた薫が、少年時代

にすでに早く秘密を知つてしまい、未生の過去に縛られてひたすら内向し行動を喪つた人物として描かれてくるのは、かつての光源氏とは正反対の生き方しか持ちえない人物を主役として、続篇の物語を語ろうとしている作者の意志が示されていると解しうる。たとえ右に引用した本文で、薫は「はじめもはても知らぬわが身」を嘆くのであるが、ここで「はじめ」を知らないのは当然として、「はて」も解らないというのは、薫の人生が遂に無明の迷いに終始せざるをえないことを、薫自身が敏感にも予感していることに外ならず、以後の物語展開を鋭く暗示している。

二

匂宮巻での薫の紹介記事は、己れの出生の秘密に深くこだわって、そのために元服ももの憂がると語られ、必ずしも宗教心の強さが強調されてはいない。しいて薫の道心に関する記述を挙げるならば、「この御みちをたすけて、同じうは後の世をだにと思ふ」「世をかへても対面せまほしき心つきて」などに、薫の出家を考えないわけではない心の動きが読みとれよう。しかし、これらは母宮の頼りなげな尼姪や、亡父の非業の死を思つての孝心というべきもので、薫がこの段階で出家遁世の強い意志を持つている証拠に挙げうるほどのものではない。ただし、次のような記述は、薫の「道心」を窺わせるものである。

中将は、世の中を、深くあぢきなきものに思ひすましたる心な

れば、なかなか心とどめて、行き離れ難き思や残らむ、など思ふに、わづらはしき思ひあらむあたりにかかづらはむは、つつましく、など思ひ棄て給ふ。さしあたりて、心にしむべき事のみなき程、さかしだつにやありけむ。人の許なからむ事などは、まして思ひ寄るべくもあらず。十九になり給ふ年、三位の宰相にて、なほ中将も離れず。帝後の御もてなしに、ただ人にては憚なき、めでたき人のおぼえにてもなし給へど、心のうちには、身を思ひ知る方ありて、ものあはれになどもありければ、心に任せて、はやりかなるすぎごと、をさをさ好まず、よろずの事もてしづめつつ、おのずからおよずけたる心ざまを、人にも知られ給へり。(一四四ページ)

ここでは薫は現世を深くあじぎなきものに思いすましていて、いざ出家しようとするときのほだしにならないように、女性関係にも気を使っているというのであって、薫の道心を論ずるときによく引き合いに出される部分である。しかしながら、そのような心も「わづらはしき思ひあらむあたり」にかかづらうのを避けているといった程度のものであり、薫が女性一般を忌避しているわけのものではない。それゆえ「さしあたりて、心にしむべき事のみなき程、さかしだつにやありけむ」といった擲揄を響かせた草子地による批評がつけ加えられているのである。草子地なるものは硬軟二様に使い分けられるものであって、草子地がすなわち作者の本音であるといった短絡は、もちろん無意味である。だが、出家のほだしになるのであるならば、それは身分や家柄の問題ではなく、本人がどれほど執着し

ているかが決め手になるべきものであり、右に記されている薫の意識が通俗的にすぎる分だけ、草子地の擲揄が有効性を発揮しているといえよう。現世のほだしとは、すなわち愛執の罪であること、そして真の道心とは現世的なものへの未練執着を断ち切ること、などは御法巻や幻巻で紫上光源氏の最晩年を描く際に、くりかえし言及されていたのであり、右の薫を無条件で道心にすすむ人物と紹介しているものに解するわけにはいかない。

薫が必ずしも女嫌いではないという事実は、右に引用した箇所ですぐ後に、次のような叙述があることから明らかである。

わがかく人にめでられむと、なり給へる有様なれば、はかなくなげの言葉をちらし給ふあたりも、こよなくもてはなるる心なく、靡きやすなる程に、おのづからなほざりの通ひどころも、あまたになるを、人の為に、ことごとしくなどもてなさず、いとよくまぎらはし、そこはかとなくなさけなからぬ程の、なかなか心やましきを、思ひ寄れる人は、いざなはれつつ、三条の宮に参り集るはあまたあり。(一四五ページ)

これは何とも奥歯にもの挟まったような解説で、いったい何をいいたいのか今一つ判然としないものがある。「ことごとしくなどもてなさず、いとよくまぎらはし」という点に注目すれば、一途に思いつめて深い関係になるような女性をつくらないようにしている心として、先に引用の「わづらはしき思ひあらむあたり」を自戒する心に通じるものがある、その一方、「はかなくなげの言葉をちらし」「おのづからなほざりの通ひどころも、あまたになるを」と語られてい

ることからいえば、それなりの好き心を示す薫であり、その結果、三条の宮に薫を慕う女が多く集っているというのは、決して道心にすすむ人物の所業ではない。

匂宮巻に語られる薫は、たとえば夕霧右大臣の婿になるというが如き、華やかな生活を求めないという意味では、疑いもなく反俗的である。しかし、ほどほどに女性関係をたのしんでいる点では、悟りすました青年ではなく、生ま身の男として、この後、薫独得の恋が語られるであろう予感を湛えているのであり、「さしあたりて、心にしむべき事のなき程」の薫像というべきである。

そのような薫の態度のよって来る理由の説明として、作者が「心のうちには、身を思ひ知る方ありて」と記している点に格別の注意を払いたい。すなわち、前節で長文を引用した部分の末尾、出生の秘密を知ってしまった薫ゆえに、「元服はもの憂がり給ひけれど、すまひはてず、おのずから世の中にもてなされて、まばゆきまではなやかなる御身の飾も、心につかずのみ、思ひしづまり給へり」とあったものが、十九歳で三位の宰相に昇進したと記すところで再度くつかえされている点に注目したいのである。十九歳で三位の宰相という官位は、かつて光源氏が紅葉賀巻で得たものであり、二世の源氏たる薫にとっては、まさに破格の栄進であるはずなのだが、彼はそれに對して少しもうれしいとは考えていない。それも現世を否定する宗教心によるのではなく、「身を思ひ知る方」つまり己れの素姓にこだわる心が原因で「はやりかなるすぎごと、をさをさ好まず、よろづの事もてしづめて、おのづからおよずけたる心さまを、人にも

知られ給へり」というのである。

これら薫を描く文章で「おのずから世の中にもてなされて」とか、「世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心」のように、「世の中」がくりかえし出てくる点に注目したい。これらは当然のこととして、現世一般、さらにいえば、京の宮廷社会の意味であろうが、薫の眼前に存在する京の世界とは、明らかに光源氏の栄光の遺産の支配する世界に外ならない。冷泉院、明石中宮そして夕霧右大臣など、当代の権威権力を代表するものたちがみんな薫に特別の好意を寄せている。それは薫が光源氏晩年の子息として与えられる当然の権利と人々は信じて疑わないのだが、その中で薫ただ一人が真相に気づいているところに問題の核心があろう。たとえば「世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心」は、現世一般を厭離する心と解いて薫の求道心の現われと見るのは、あながち誤りではないにしても、そのような薫の心情の裏側に、「心のうちには、身を思ひ知る方」があるという前提が働いている限りにおいて、光源氏の強い影響力を残している宮廷社会の中に、自分の座るべき椅子のない異和感に悩む薫の心、と読んでも深読みにはすぎることはないのではあるまいか。この点について後藤祥子氏が「薫の道心の萌芽を、純粹に宗教的な精神の発露と見ず、栄光の現実から転落する恐怖への緩衝工作だと云い切ってしまったては異論がある」と抑制を示されながら、薫の「血と階層」の問題に鋭く切り込んでおられるのは傾聴すべき卓見である。薫が己れの出生の秘密を知ってしまったために、世の常の青年のような自由な振舞いができないでいる、それを世の

人は道心厚い奇特な青年と評価するのである。

そこで統篇の夕霧の役割に注意する必要がある。匂宮巻の夕霧は、薫の素姓にいささかの疑念も持たず、「わが御子、どもの君達よりも、この君をば、こまやかにやむごとなく、もてかしづき奉り給ふ」やうな有様で、何とか婿に迎えたいと焦慮すると語られているのだが、それは正篇の夕霧と矛盾するものがある。柏木が女三宮の姿を初めて隙見した蹴鞠の夕から、夕霧は終始柏木の不幸な情熱の立合人であり、臨終間近い病床を見舞って柏木の遺言を聞くエピソード、あるいは横笛巻での柏木遺愛の笛をめぐって光源氏と対座する夕霧など、彼が柏木の死の意味をかなりの確度でもって感じとっていたことは動くまい。夕霧は正篇物語では一貫して体制内批判者あるいは批判的傍観者の役を過不足なく演じていた。しかるに、匂宮巻以降の夕霧は薫の素姓に疑惑の目を向けるどころか、かつての右大臣(弘徽殿女御の父)や致仕大臣(昔の頭中将)のような事大主義のやや滑稽な大人に描かれてくる。このような夕霧像の変貌は、物語の主役を演ずる世代が薫や匂宮に移ってしまい、夕霧が単に小うるさい権威主義の老人の役になってしまった結果であろう。そして又、夕霧が薫の素姓にうすうす気づいて疑惑の目を向けているような状況下では、それこそ薫は出家遁世するより外の道はあるまい。柏木に最も近い距離にいた夕霧さえもが気づいていない真相を、薫だけがいち早く自覚しているという悲劇的な孤立性でのみ、薫を主役にする物語が可能になるのだ。そのことは同時に、横笛巻前後の時点では、薫を主役に立てる統篇構想が未だ最終的には固まるに至っていない。

なかったことを物語っている。

三

右に見てきたように、匂宮巻の薫は出生の秘密にこだわって、光源氏の残光が支配する宮廷社会に背を向ける人物となっていた。匂宮巻での薫が特に道心をもって特徴づけられる描かれ方ではなかったのに、橋姫巻に登場する薫は一変して求道心の旺盛な人物の印象を強く前面に押し出している。橋姫巻で薫が初めて姿を見せるのは、宇治の阿闍梨が冷泉院に参上して八宮の近況を話題にした折である。

宰相の中将も、御前にさぶらひ給ひて、われこそ、世の中をばいとすさまじう思ひ知りながら、行など人に目とどめらるるばかりはつとめず、口惜しくて過し来れ、と人知れず思ひつつ、俗ながら聖になり給ふ心の掟やいかに、と、耳とどめて聞き給ふ。(二二七ページ)

さらに、宇治に帰る阿闍梨に托した八宮への伝言は次のようなものである。

法文などの心得まほしき志なむ、いはけなかりし齡より深く思ひながら、えさらず世にあり経る程、公私に暇なく明けくらし、わざととち籠りて習ひ読み、大方はかばかしくもあらぬ身にしても、世の中を背き顔ならむも、憚るべきにあらねど、おのづからうちたゆみ、紛らはしくてなむ過し来るを、いとあり難き御有様を承り伝へしより、かく心にかけてなむ頼み聞えさする。(二

一九ページ

これらでは薫は求道心の強い人物と自ら思い、言葉に出して力説するものと描かれてくる。つまり、これらは共に薫の心内であり詞であつて、作者による客観的な描写でないところに注意する必要があるようだ。右の心内で「われこそ、世の中をばすさまじう」というのは、前節で触れた匂宮巻での「おのづからおよずけたる心ざまを、人々にも知られ給へり」に通ずるものがあり、世間態を第一に慮る薫の思考の型が鮮かに現われているものであるが、薫自身が自らを道心にすすむ者と考えているのは事実である。

右の薫の伝言を聞いて八宮のもらす感想は次の通りである。

世の中をかりそめのことと思ひ取り、いとはしき心のつきそむる事も、わが身に憂ある時、なべての世もうらめしう思ひ知る初ありてなむ、道心も起るわざなめるを、年若く世の中思ふにかなひ、何事も飽かぬことはあらじと覚ゆる身の程に、然はた後の世をさへ、たどり知り給ふらむがあり難さ。ここには、然るべきにや、ただ厭ひ離れよと、ことさらに仏などの勧めおもむけ給ふやうなる有様にて、おのづからこそ、静かなる思ひかなひゆけど、残少き心地するに、はかばかしくもあらで過ぎぬべかめるを、来し方行く末、さらにたどる所なく思ひ知らるるを、かへりは心はづかしげなる法の友にこそはものし給ふなれ。

(二一九―二二〇ページ)

八宮はいかにも素朴に薫の道心に感嘆して、篤実な八宮の人柄を浮き彫りにしている。このように八宮を驚嘆させた薫の求道心が、

必ずしもその場限りの社交辞令ではなかったのは、その後、宇治を訪ねた薫が八宮の生きざまを目のあたり見て感動し、八宮を法の師と仰いで「暇などして程経る時は、恋しく覚え給ふ」ような有様で、宇治へ通うことが「三年ばかりになりぬ」(二二二ページ)と記されてくるのが何よりの証拠である。さらに女性問題についても、薫は八宮の姫君たちをゆかしく思わないわけではないが――それというのも、冷泉院が八宮の姫君たちへ関心を示し、六条院へ女三宮が降嫁した前例などを話題にしていた――、「されど、さる方を思ひ離るる願に、山深く尋ね聞えたる本意なく、すぎすぎしきなほざりごとうち出で、あざればまむも、こと違ひてや」(二二二ページ)と反省するのであつて、橋姫巻に描かれてくる薫は、文句のつけようのない道心堅固な人物像になっている。少くとも道心堅固な人間であると自分で固く信じこんでいる薫として描かれている。

このような橋姫巻の薫像は、前節で見てきた匂宮巻の薫像とは別人の趣きがあるといえるだろう。現在の通説的な薫理解では、匂宮巻と橋姫巻との間の薫を一体として捉え、作者にあつて薫は一貫して求道心の強い人物と構想されていたと解くものの如くである。そして、たまたま橋姫巻で薫の道心が具体的に描き出されたと考えるようである。その理由としては、橋姫巻に語られる一途に道心にすすむ薫こそが、体から芳香を発する仏に愛でられている理想人物にふさわしいと解くのである。たしかに匂宮巻にも薫の反世俗の心ざまが語られていて、橋姫巻の薫像を匂宮巻に逆行させてもそれなりに辻褄は合うのであるが、匂宮巻一帖の問題として考えると、薫

像の最大の特徴を道心に求めるわけにはいかないのは、前述してきた通りである。匂宮巻の薫から橋姫巻の薫への推移について、それを矛盾であるときで言い切るつもりは私にもないのだが、その間に飛躍ないしは変化があることは認めなければならないと思われる。問題はそれを何と解くかである。

この点について吉岡曠氏が、匂宮巻の薫は「出生の秘密とそれにもとづくもやもやした気分、これを薫の厭世感と呼んでいいかもしれないが、その厭世感と道心とはそれぞれ別のもの」であると論じられたのは、鋭い提言であった。氏はさらに、右に引用した薫と八宮との出合いの場をとり挙げて、八宮が「そんな若造のいわれのない道心など信用するに足りない、ということもできたはず」であり、「八宮の節の通った、動機の明瞭な道心と対比されて、薫の道心の特異性がおのずから明らかになるような仕組みになっている」と論じられて、橋姫巻の薫の道心について、

これを薫の主観に即した解釈、いいかえれば薫自身の自己診断とみなしてもさしつかえないと思う。なぜなら、薫の道心とか超俗的態度とかは一種の擬態に相違ないにしても、薫自身それが擬態であることに気づいた形跡は、以後の物語を通して見あたらなからである。

説かれる。^{注8}そして、それが薫の主観に即した解釈、自己診断であることは、匂宮巻の語りや八宮の薫賛美などを通して、読者がみんな気づくような描き方になっているとして、「表裏二様の複雑な語り方」・「二重の語り口」という「方法」を論じられるのであった。この「二

重の語り口」という把握は、薫を「現実喪失者」と規定する卓見とともに、統篇論として傾聴すべきものである。先に触れたように、橋姫巻の薫の言動を重視する通説的薫理解に対して、吉岡氏は匂宮巻の薫をより根源的なものと捉えて、その視座から橋姫巻の薫の道心をあまり理想化して受けとめるべきではないと主張されるところが、真に新鮮な問題提起であった。

薫を過度に理想化すべきではないと主張される吉岡氏の論点に、私は深甚な敬意を表したい。なかなか薫を「現実喪失者」と捉える視点の有効性は、統篇全帖を貫くものとして卓越したものである。だが、吉岡氏は匂宮巻の薫でもって橋姫巻を律するのに、やや性急にすぎる面がありはしまいか。氏が匂宮巻の薫は厭世感を抱いてはいるが、それを道心と呼ぶわけにはいかないと主張される。それはそれで全く正しいのであるが、その事は匂宮巻では作者が薫を描くに際して「主観に即した解釈」としての「道心」を与えていないことに外ならない。さすれば、そのように厭世感で描かれた薫が、なぜ急に橋姫巻になって熱心に「主観に即した解釈」を口にするようになるのかの説明は、やはり必須なのであるまいか。橋姫巻の薫を重視して、それを匂宮巻にも当てはめ、先験的に道心が与えられている理想人物と捉える理解に対して、吉岡氏は匂宮巻の薫から橋姫巻を解釈してくるのであるが、この二帖の関係はそんなに単純ではないのであるまいか。すなわち、この二帖の間には構想上の飛躍、ないしは薫像を創出する上で状況に即した再設定の如きものを考える余地があるのではないか。

その場合、匂宮巻の薫が果して吉岡氏の説かれるような「出生の秘密とそれにもとづくもやもやした気分」と捉えてよいものか否かは問題である。「もやもやした気分」あるいは「感傷」などという次元ではなく、はるかに切迫した危機感あるいは孤立感といったものが薫を捉えて離さなかったのではないか。前節までの考察で見えたように、世間のすべてが薫を光源氏晩年の子息として扱い、そのために破格な栄光が与えられている状況の下で、薫自身が独自の推理で己れの出生にかかわる秘密の真相を知ってしまったというのは、決して感傷や気分のレベルに留まるものではないと思われる。

あえて当世風な単語を用いるならば、薫のアイデンティティそのものが問われているといえよう。前に触れた後藤祥子氏の説かれるように、もし己れの素姓が露見したら、という際どい恐怖感に基づく薫の反俗志向であると考えられるのである。

秘密が露見すれば破滅である、というスリリングな設定は、薫にのみ課せられた運命ではない。それは藤壺所生の皇子が実は光源氏の子である、という形で正篇の物語構想の核心になっていたものの逆転図として、いま薫の上に課せられているのである。もし藤壺の生んだ皇子が光源氏の子であると知れたならば、その瞬間にすべては崩解するというきわどきの上に、光源氏の一回限りの極限の栄光が語り出されていた。すなわち、歴史の上では絶対に語り出されることのありえない極めて物語的な栄光を確保しているものが、密通事件に外ならなかった。もし露見したならば、という危機感を一方に据えることで、光源氏の物語はありうべからざる現実を物語内に

虚構することに成功したのである。それは又、換言するならば、光源氏の類例を見ない理想性は、そのような綱渡りに近い状況を易々と乗り越えて、帝の実父という極限の栄華を実現させたのであった。

もし露見したら文字通り一巻の終りであるという危機感では、光源氏と薫とは通底するといわなければならないものであるのだが、一方がその秘密を逆手にとって破天荒な栄華を実現したのに対して、他方がその秘密に縛られて自閉的に栄華に背を向けるものになっている。その関係がすなわち正篇に対する続篇であるといえよう。匂宮巻で真相を察知してしまったときの薫の心境に近いものを、しいて正篇の中に求めるとすれば、若菜下巻で光源氏がかつての父帝も今の自分と同様に、すべてを承知していた上で素知らぬ顔をしておられたのではないかと恐懼する場面が比定されよう。光源氏が己れの若い日の過ちについて、とり返す術がないゆえに身の毛もよだつような悔恨を実感すること、匂宮巻の薫が自らの素姓を知ることとの間には、もちろん質的に決定的な違いがある。だが、光源氏が晩年の宿命的な事件によって実感した運命の恐ろしさが、すなわち薫を縛るものに作用しているという意味において、その二つは表裏する関係にある。柏木が女三宮と密通したことについて、一般的にはさしたる罪でないことを十分承知しながらも、光源氏に疎まれる人生に堪えきれず死んでいかざるをえなかったものに対応して、薫が己れの素姓にこだわる心理がある、というような言い方も許されよう。光源氏は妻を寝とられる滑稽な老いた夫の役を演ずる一方で、柏木を死に追いやり女三宮を出家させる程の力は喪っていないので

あった。そのような光源氏の力の巨大さは、彼の没後にも明石中宮や夕霧右大臣の上に残光として輝いているのであって、薫は柏木の子として光明の世界に対しほとんど本能的な異和感を抱くものと語られるのは、まさに論理の極致といえよう。光源氏晩年の暗い運命の申し子として生れた薫に、いったいどのような生き方が可能であったか、それが匂宮巻執筆に際して作者の直面した課題であったと私は考える。

四

統篇始発部の薫像は、匂宮巻と橋姫巻との間に一種の飛躍があり、整合しない描かれ方になっていて、そのどちらかを重視するかで薫理解に大きな差が生じてくることになる。しかして、これはどちらかを重視するという問題ではなく、匂宮巻から橋姫巻への物語構想の展開に直結しているものではないか。匂宮巻が橋姫巻に何の疑問もなく接続している状態があったならば、これまでくどくどと考察してきた問題の過半は論ずる必要がなかったであろう。この接続関係については、すでに古く「細流抄」と「玉の小櫛」とで解釈が分れて^{注10}いる。それは橋姫巻の薫を何歳と読むかという形になっているために、年立論上の問題点と整理されるのであるが、これは年立論などという限定された視野で論ずるべきものではなく、源氏物語統篇がいかにして形成されていくのか、その構想過程あるいは構想原理の問題として捉えるべきもののではないかと私は考える。

匂宮巻から橋姫巻への問題で、いまあえて年立論的アプローチにこだわるならば、橋姫巻の薫が宰相中将で登場してくることの意味は、極めて重いものがある。匂宮巻に語られている光源氏没後の状況とは全く無関係に、橋姫巻で八宮が新しく語られている以上、そこに介入していく薫は匂宮巻の制約を受けることなく、いかような状況の下で描かれてもよかったはずである。しかるに、橋姫巻の薫が実際に宰相中将でもって登場しているのは、やはり匂宮巻での十九歳三位の宰相中将という設定を承けていると解すべきである。そこで注意したいのは、ただ単に年齢と官位だけを引き継いでいるものではなく、十九歳の薫のすべてを承けて橋姫巻の薫が存在すると考えられる点である。すなわち、少年薫が己れの出生の秘密を知って元服ももの憂がったという設定、三位の宰相に昇進しても「心のうちに、身を思ひ知る方ありて」憂いに沈む薫という設定を、丸ごと承けるものとして橋姫巻での薫の登場があると考えられるのである。それゆえに、匂宮巻の薫と橋姫巻の薫との間に整合しないものがあるかに見えながら、匂宮巻で語られる薫の反俗志向を前提にして、橋姫巻で己れの求道心を力説する薫が描かれているといわなければならないのである。

匂宮巻の薫から橋姫巻の薫へという展開を物語状況に即しているならば、光源氏の弟宮を語り出して新しい物語の舞台を作り出したことの一事に尽きる。すなわち、光源氏に対立した過去を持つ八宮という具合に、正篇のはるか昔に楔をうち込んで物語状況を設定し、そこに紛れもなく固有の磁場を持つ物語空間を創出することに成功

したのである。しかも、八宮一家の造型が真に続篇的でありえたのは、それまでの京中心の物語から一転して、「宇治」という場所を物語にとり込んできたことにあると考えられる。物語の舞台を宇治に定めたところに注目して、すでに高橋亨氏、^{注11} 広川勝美氏^{注12}によって「時空論」として論ぜられている。宇治という歴史的空間に、菟道稚郎子などの反王権の視点から迫る両氏の新鮮な論述に敬意を表したい。ただし、いま私が考えたいのはもっとヤボなこと、句宮巻の巻頭で続篇の始発宣言した作者が、具体的な物語構造を獲得するのは「宇治の八宮」の着想によってであったことの意味であり、さらにいえば句宮巻から橋姫巻への構想過程の追尋である。

一般的にいえば、物語作者の構想過程の復元を試みるなどということは、論者の独りよがり以外の何ものでもないだろう。それは私といえども十分に承知しているのだが、句宮巻から橋姫巻へという課題に関する限り、ある程度は追跡が可能ではないかと思われる。それというのも、句宮巻末の突然の中断を承ける紅梅竹河という正体不明の巻があって、その後に橋姫巻の宇治の八宮の登場を見るという形態的な特殊性が、作者の試行錯誤の軌跡ではないかと考えるからである。句宮三帖ほどの角度から見ても、各々が自立する内容を備えた物語とすることは困難である。これら三帖については、現在でも作者が異なるのではないかという疑問を完全に払拭できないのが実情である。たしかに句宮三帖は、語彙といい文体、構想といい、あまりにも拙劣な点が目立って、正篇四十一帖の作者と同一人物の筆と信じがたいものがある。だが、正篇と異質であるという印象を、

そのまま別筆であるとするのは短絡のそしりをまぬかれまい。もし別人の擬作ないしは戯作であるならば、紅梅巻や竹河巻はもう少し辻褄が合うような内容になっていてしかるべきではないか。句宮三帖それぞれが中絶同様の終り方をしているのだが、もし誰かが後でつけ加えた巻であるならば、出来不出来はともかくとして、つけ加えるべき動機と内容は用意されていて筆を執ったはずであり、途中で放棄するのはむしろ不自然である。句宮三帖が欠点を多く含んでいることが、逆に紫式部の作である証拠と私は考えたいのである。

これらが欠点ばかり目立ち、不完全であるのは、続篇執筆に際して作者が語るべき主題を持ちながら、それを実現させるための物語構造の設定に苦渋した未定稿が、何らかの事情でそのまま世間に流布してしまったものではないかと考える。

句宮巻の巻末と紅梅竹河両帖が、作者の試行錯誤の跡なのではないかという仮説を私が持つのは、それらが一つの方向性を指し示していて、その特徴がすべての宇治の八宮に収斂していると目されるからである。まず句宮巻で正篇に語られず全く新しく紹介される人物として、冷泉院の女一宮がいるのであるが、新しく語り出した以上、女一宮に物語展開を托そうとした作者の意図は明らかであろう。そこでは、当然のことながら、冷泉院が実は光源氏の子であるという血筋にかかわる問題がかくされているのであり、出生の秘密を知って苦悩する薫像に対応している。そして紅梅巻では、再婚者同志という殊更に複雑な家庭環境が提示されて、後妻の連れ子である宮の姫君をめぐるあやにくな展開が予感されるものになっている。又、

竹河巻ならば、没落したかつての名門の悲哀が中心になっている。

これら匂宮三帖は正篇物語の拾遺ないしは後日談の体裁をとりながら、話題の焦点はあくまでも薫や匂宮がかかわっていく物語状況の創出を意図したものであるといえよう。それに加えて、夕霧右大臣の栄華に対するもう一つの世界を、何とか物語に定着させようと努力していると把握できる。たとえば紅梅巻における宮の姫君の場合、後妻の連れ子という境遇は、後の浮舟でもう一度くりかえされるものであることから考えても、作者にとってよほど捨てがたい人物設定であったと考えられる。しかし、紅梅巻では紅梅大納言が自分の姫の婿に匂宮を考える一方で、匂宮は宮の姫君に関心を燃やしている緊張を孕む状況の外に、大納言が夕霧右大臣に対抗心を燃やして張り合っているという、もう一つの緊張関係が用意されている。社会的な緊張と家庭的な緊張とがからみ合って、より劇的な展開になることは大いにあり得ることと思われるのだが、紅梅巻の実際はそれがうまく構造化されるに至っていない。おそらくは、それが巻を中絶させる理由の一つになっていると思われる。

このような紅梅巻の問題点は、竹河巻に引き継がれて新しい模索が試みられている。すなわち、宮の姫君をめぐる「暗さ」は、没落名門という形で社会的な視野の下で再現されてくるのである。源氏一族から離れた玉鬘が、夫髭黒の没後、思惑がごとくくに外れて苦境に追いこまれるのであるが、そこでは夕霧右大臣家が玉鬘一家の前に立ちふさがる壁になり、光源氏直系の「明」と光源氏から離れた者の「暗」とが、極めて対照的に浮び上っている。しかも、そ

のような対立する構造を語り出す上で、竹河巻はこれまでの物語とは異なる語り手による、という断りの草子地を巻頭に持っている点で特異な巻になっている。これまでの語り手とは、当然、光源氏に仕えていた女房ということになるであろう。それゆえ、竹河巻が髭黒に仕えていた「わる御達」の語りであるという断り書きは、それを採録した書き手の存在を示しているという意味で、この上なく作爲的な草子地といわなければならないのである。つまり、これまでとは異なる視点を設定することにより、没落名門の側から陽の当たっている世界に対して恨みや嫉妬を含む批判的な物語、あるいは、これまでの表から見た物語に対して裏面史を語る自由を意図した方法的実験、と考えられる。そのような実験は、作者の術学的な好みによるものではなく、匂宮巻で語った薫を生かすための物語状況を創出すべく、光源氏世界を対象化する統篇固有の視座を模索していた一つの証拠と言えよう。だが、そのような方法的実験にもかかわらず、竹河巻は薫のかかわっているような姫君を作り出すことに失敗して、中絶同様に巻を閉じるのであった。

五

紅梅竹河の二帖は、匂宮巻での統篇物語始発宣言をうけ、それにふさわしい物語状況を作り出そうと試みながら、それぞれ未発に終わっているのだが、それらは夕霧右大臣に代表される光源氏直系の栄華の世界に対立する「もう一つの世界」を語り出そうと意図していた

点で共通するものがあつた。紅梅巻における宮の姫君や竹河巻での玉鬘一家のように、「暗さ」そのものを構造化しようと意図しつつも、結局は失敗に終わったために、匂宮三帖が現形のような中途半端な形態になったと思われる。それというのも、匂宮巻に提示された薫像が、世間的には光源氏の子息として何一つ不足のない恵まれた境遇にありながら、薫自身は己れの出生にまつわる深刻な苦悩を抱くものと語られていて、そのような矛盾的状况をどのように物語化するか、換言すれば、明るさの中の暗さをどのように構造化できるかが、続篇始発の最大の課題であつたと考えられるからである。

そのような匂宮三帖での試行錯誤は、橋姫巻で見事に実体化に成功する。すなわち、竹河巻で試みられた、光源氏一族から離れたために夕霧右大臣家と対立するかつての名門、という構図が更につきつめられて、光源氏に敵対したために生涯を日蔭者として過さなければならなかった古宮、という全く新しい人間関係を作り出すことにより、「もう一つの世界」が完成するのであつた。あえて言い募るならば、紅梅巻での大納言、竹河巻での玉鬘が、夕霧右大臣家との対比で捉えられていたために、表層的であつたのに対して、より根源的に、かつて弘徽殿太后によって坊がねに擁立された親王、光源氏の失意の時期に時を得ていた弟宮という設定で、遠く遡って正篇全体に根ざす状況を創出したとき、続篇物語の構造が確立したのである。

須磨明石巻の時点で桐壺院の八宮の構想があつたか否かは、問題になる余地は全くなからう。あるなしにこだわるならば、冷泉院が

十の宮であることを記すのが橋姫巻である一事をもってしても、八宮の物語構想は徹底的に続篇固有のものというべきである。しかし、あの弘徽殿太后ならば当然そのような策謀をしたであろうと、読者を納得させるところに、橋姫巻における八宮造型のポイントがある。「光かくれ給ひにし後」だからこそ、これまで光源氏の榮光の蔭にかくれていた古宮が、物語表面に浮び上ってくることでできたのである。

語りの視点を変換して、それまでの物語とは異質な物語状況を創出しようとした竹河巻の方法的実験は、光源氏の光に浴することなく、その裏側に生きた弟宮の創造に展開していると私は考える。その意味で、藤村潔氏が催馬楽「竹河」の詞章「橋のつめなるや」に橋姫巻への連繫を読まれているのは、^{注13}鋭い指摘であつたと思うのである。竹河巻での匂宮巻を相対化する巻頭の草子地がなかったならば——そのような構想の方向性がなかったならば、正篇全体を相対化する八宮の造型に結びつかなかったのではないか。しかも、八宮の存在だけならば自立する世界たりえず、弘徽殿太后の策謀という経緯を案出したとき、光源氏世界と対峙した「もう一つの世界」が、独自の磁場を持つものとして定立したと考えられる。桐壺巻における桐壺更衣と弘徽殿女御の対立は、最も原初的であると同時に最も根源的な対立の構図であつた。その弘徽殿太后を橋姫巻で八宮世界に再生させたのは、秀逸の一語に尽きる。

そこで特に注意したいことは、八宮の人物造型に至る先駆として紅梅竹河の物語があると考えられる以上、宇治を舞台にする八宮一

家の物語は、八宮や姫君たちの運命を語る主題的要請によるものではなく、匂宮巻での薫像の根本設定に従い、そのような薫のかかわっている状況を作り出すために語られたもの、と最終的に認定すべきだと思われる点についてである。現在、宇治十帖の物語は大君浮舟の生き方を追究する「女の物語」であるとして論じられることが多い。それはそれとして重要な課題であり、その線上に宇治十帖の貫かれる主題が想定されることを、一概に否定するつもりは私にもない。だが、続篇論として見る場合、宇治の八宮と姫君を必要とした物語構想の端緒が、己れの出生の秘密に悩む薫にあったと目されることは、決して見逃してはならないだろう。

そのことは薫の境遇と八宮のそれとが共通類似していることで明らかかなものがある。すなわち、両者とも自らの意志ではなく、反光源氏状況に置かれている、という一点で相似形なのである。もちろん、これが単純な偶然であるはずがないのであって、最も統篇的な人物たる薫を生かすための物語状況を模索した結果、薫の置かれた特殊な境遇に共通する過去を持つ人物が作り出されたのではないかと私は考える。

これまで縷説してきたように、匂宮巻での薫は元服以前に己れの出生の秘密を察知してしまい、そのためにただひたすら内向し、出世にも関心を寄せることができない人物と語られていた。しかして、薫の示す反俗志向とは、決して現世一般を厭離して浄土を欣求する底のものではなく、いうならば光源氏の残光を眩しいと感ずるものに外ならず、明るさに背を向け暗さに惹かれる生の姿勢の謂であっ

た。それに対して、八宮の場合は、光源氏——弘徽殿太后という根源的な対立の契機を背景にすることによって、光源氏世界から弾き出された人物であり、光源氏世界の栄光とは無縁な日蔭者の人生が「宇治」という土地によって象徴されている。その際の「宇治」は、喜撰法師の和歌のイメージによって、世捨て人の住む場所が第一義となろう。光源氏に疎まれ京の世界から弾き出された八宮の採りうる生き方は、現世の欲望を捨てた「俗聖」以外にありうべくもない。そして、世捨て人の住む土地としては宇治が最も物語的であったのだ。そのような八宮の存在を知った薫は、己れと同種同型の運命を感じとって、あたかも吸い寄せられるようにして宇治への道を迎るのである。

先に引用した如く、八宮は自分の体験に即した道心論を開陳して、それに当てはまらない薫を稀有な青年と賛嘆するのであった。すなわち「わが身に憂ある時、なべての世をうらめしう思ひ知る初ありなむ、道心も起るわざ」という定義は、疑いもなく正論である。八宮は薫の秘密を知らないために、薫の表面的な華やかさしか目に入っていないのであるが、薫自身の問題としては誰にも打ちあけられない「わが身に憂ある」状態なのである。それを匂宮巻では「心のうちには、身を思ひ知る方ありて」と記されていたのであって、その意味でも八宮と薫とは同類であるといえよう。つまり、八宮が薫を稀有と評するのは裏腹に、匂宮巻の薫を前提にする限り、読者の側では薫が八宮に惹かれる必然は十分に納得がいくのである。

薫の「暗さ」は光源氏晩年の暗さであり、しかも、宮廷社会で誰

一人気づいてはおらず薫だけが知ってしまった秘密として、薫自身の心の中の「暗さ」であるのに対して、八宮の「暗さ」が光源氏世界の裏側という、正篇全体を相対化する社会的レベルで設定されていることに注目したい。すなわち、己れの血筋を知ってしまったがゆえに、現在与えられている栄光に背を向け、ただひたすら自閉的に内向する人物——吉岡曠氏のいう「現実喪失者」——として描き出される薫の内的な「暗さ」に見合う状況が、「宇治」という京から離れた物語空間と、「八宮」という光源氏と政治的に対立した過去を持つ人物との創造によって外化されたとき、統篇物語は具体的に動き出すことが可能になったのである。統篇物語が具体的に動き出すとは、屈折する心理だけで行動を喪った人物として特徴づけられた薫が、そのような薫であるがゆえに行動せずにはおられない必然的な状況の整ったことを意味する。それが八宮の存在を知って、引き寄せられるように宇治への道を辿る薫なのである。薫が宇治の八宮に惹かれるのは、八宮個人の道心の深さにあるのではなく、八宮が光源氏の「光」の蔭に生きざるをえなかった全経歴に対して、薫が他人事ではない共感を覚えるからであろう。薫が心惹かれたのは、行いすました宇治の阿闍梨ではなく、そこで噂に出た「俗聖」の八宮であったところに「宇治の八宮」が薫にとって特別の存在であったことを明白に窺わせるものがある。それゆえ、橋姫巻で八宮の噂を聞いた際に示す薫の反応——いかにも道心堅固であるかのような主張——を、あまり過大に評価するのは危険である。もちろん、その時の薫が自分を偽って心にもない綺麗事を述べたてているわけの

ものではない。だが、元服以前に出生の秘密を知ってしまった薫が、光源氏の栄光の遺産の上にぬくぬくと安住することができないという匂宮巻の薫像を前提にして、宇治の八宮の存在が提出されていると考えられることでいえば、薫が京の世界に背を向けて宇治への道を辿ること自体に意味があるのだ。薫と相似形の過去を持つ八宮の世捨て人の生きざまに引き寄せられ、宇治へ赴く「口実」ないしは「きっかけ」として、薫の語る道心がある。もし薫が父母の犯した過ちを一身で償おうというのであれば、八宮の存在とは別個に自発的に出家遁世すればこと足りるのであり、宇治へ赴くこと自体は、薫の強い自己主張にもかかわらず、それが純粹な宗教心の発露であると認めるわけにはいかない。その点で先に引いた吉岡氏の「薫の主観に即した解釈」というのは正しいと私は考える。まさしく薫は真正の求道心とは程遠いところにいる。しかしながら、問題の所在は薫の道心が本物が偽物かにあるのではなく、栄華と恋の巷である京の世界に背を向けることのみ、己れの存在の主張ができる薫という人物を、物語の主役に立てようとしている作者の意志そのものにある。

先に私は薫と八宮の境遇が相以形であると言ったが、光源氏に敵対して弾き出された人物という点で、八宮と同型なのは柏木である。ということは、薫と同じように父の暗い運命に規制されざるをえない人物として大君が浮び上ってくるのは、ほとんど論理の必然である。ただし、大君が真に主役を演ずるようになるのは、椎本巻で八宮の薨去が語られた後になる。保護者を全く喪ってしまった、父宮の

暗い人生の重みを直接担っていかなければならなかった時、大君は熱心な薫の求愛を受けることになる。薫と大君の物語の展開については、想を改めて次の機会に譲りたいと思う。

注

- 1 匂宮三帖については、本稿に先立って「源氏物語匂宮三帖試論」(『日本文学新見』笠間書院 昭52)、「源氏物語統篇の年立をめぐって」(論集中古文学I『源氏物語の表現と構造』笠間書院 昭54)、「源氏物語統篇の並びの巻をめぐって」(『国語国文研究』62号 昭54・8)がある。参看して頂ければ幸甚である。

- 2 清水好子氏「薫創造」(『文学』昭32・2)

- 3 清水好子氏「源氏物語の俗物性について」(『国語国文』31・7)、秋山慶「薫大将の人間像」(『源氏物語の世界』東大出版会 昭39)など。

- 4 若菜上巻の朱雀院の言葉「程々につけて、宿世などいふなることは、知り難きわざなれば、よろづに後めたくなむ」朝日古典全書四の28ページ

- 5 若菜下巻の光源氏の言葉「宿世などいふらむものは、目に見えぬわざにて、親の心にまかせ難し」同二〇五ページ

- 6 後藤祥子氏「薫像試論―出生、道心、結婚観―」(『日本文学』昭50・11)なお、後藤氏は同論文で薫が実父の名を知ったのは橘姫巻での弁の君の出現によってであったと解されている。

- 7 吉岡曠氏「匂宮巻の薫像」(『源氏物語論』笠間書院 昭47)同書四一六ページ。

- 8 前掲書四二五ページ。

- 9 若菜下巻、四の一九八ページ。

- 10 注1の拙稿。

- 11 高橋亨氏「宇治物語時空論」(『国語と国文学』昭49・12)

- 12 広川勝美氏「源氏物語・宇治時空論―その基層と表層―」(『日本文学』昭50・11)

- 13 藤村潔氏「源氏物語の正編と続編」(『古代物語研究序説』笠間書院 昭52)